

# 風土を温める

あたた

シリーズ 高山の文化財⑩

【市指定文化財】

## 鶴毛陣羽織

助けてもらったお礼に自らの羽根を美しい布に仕立てたのは『鶴の恩返し』の昔話。そのほか亀と並んで長寿のたとえに使われたり、祝儀袋の水引や千羽鶴せんぱつるにみられたりするように、鶴は日本人にたいへんなじみ深い動物です。その鶴の羽根を用いた非常に珍しい陣羽織じんばわりを紹介します。

✦

今からおよそ四百年前、身分の高い武將は集団戦の中で目立ち、また接見の際などに威容を示すため、身に着けるものに趣向を凝らし、その存在を誇示していました。



鶴毛陣羽織

そのような中で陣羽織も斬新で奇抜な色やデザインが取り入れられ、舶来の布や鳥の羽根など珍しい材質

のものが好まれました。陣羽織は胴服ぶくに起源があり、袖のあるものとなつていものがありました。鎧の上から着ると袖が邪魔であるため、一般に陣羽織といわれている袖のない形になったものと考えられています。

✦

鶴毛陣羽織は、高山の礎いしづえを築いた金森長近が使用していたものです。長近は、大永四（一五二四）年、美濃に生まれ、近江の金森かねがもり（現在の滋



同上 裏地



金森長近の肖像画

賀県守山市）で育ちました。初め織田信長の側近として仕え、その後は豊臣秀吉、さらに徳川家康に従いました。長近は、それら主君の命により、数多くの戦いに参加しています。

その内、文禄の役（一五九二）では、名護屋城（現在の佐賀県）へ行っており、その際に秀吉からこの陣羽織をたまわつたと伝えられています。当時は主従や同盟関係のしるしとして、陣羽織や茶器などがやり取りされていました。

長近は、慶長十三（一六〇八）年に亡くなりますが、その霊を弔うため、子の可重ありしげが高山の東山に素玄寺を建立しました。そのため、陣羽織のほか、軍扇ぐんせん、采配さいはい、鎧通よろいどおしなどの遺品が素玄寺に寄進され、現在も残されています。

✦

この陣羽織は、全面が鶴の羽根で覆われており、前側両脇裾に一個ず

つ、背面に三個の黒い毛の円形模様があります。肩の部分には一日に数センチしか織ることのできない綴つづれ織おりの布を使用。襟部分の金欄きんらんは後に足された

ものです。脇の下は大きく開き、組み合わせた紐によって前後をつないでいます。裏地は黄茶色の絹に菊と桐の刺繍が多数施されています。

✦

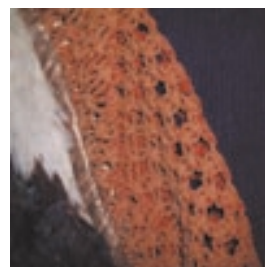
このほかに、鳥の羽根を用いた陣羽織としては、徳川家康から井伊直政に贈られたという「孔雀尾具足羽織」が、新潟県与板町歴史民俗資料館にあります。また、豊臣秀吉は、孔雀の羽根を縫いつけた陣羽織を用いていたといわれています。

〈所有者〉 素玄寺

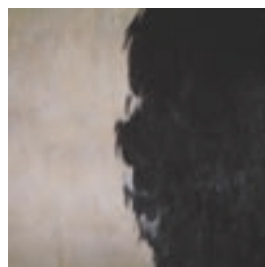
〈時代〉 安土桃山時代（十六世紀）

〈寸法〉 身丈七二・三センチ

肩幅五四・〇センチ



脇のつなぎ部分



黒毛円形模様部分